



観光地点検

奈良県立大学地域創造学部講師

岡本 健

アニメファンのイメージ創出 違和感チャンスに魅力発見

公開された。原作では、西宮北高校とは明示されていないが、原作者の出身校でもあり、モデルにされていることは記述の端々から感じられる。

また、このアニメが放映され、ヒットした時は、ちょうどYouTubeやニコニコ動画などの動画投稿サイトが普及し始めた頃と合致する。「涼宮ハルヒの憂鬱」では、アニメのエンディングテーマ曲に合わせて登場人物がダンスを踊る映像が流れたことをきっかけに、実際にそのダンスを踊った様子を動画サイトにアップする現象が見られた。近年、スマートフォンで撮影した静止画や動画がネットにアップされ、話題になることが多いが、こういった形の消費形態が開始された時期なのだ。アニメ聖地巡礼も行われ、その様子が動画共有サイトで公開された。

生活空間と観光地の齟齬

このように、ユーザー側では盛り上がった聖地巡礼だが、全体としてまちおこしをしていこうという気運にはならなかった。その理由として、アニメに描写された場所が「まちおこし」になじみにくい地域であることが考えられる。

他地域ではあるが、アニメの聖地となった地域で地域住民から反発の声が出るケースがある。その反発の内容の一つは、アニメに描かれた風景自体に違和感があるというものだ。そして、もう一つはアニメファンの来訪に違和感を覚えるというものである。これらの批判は地域住民のみならず、他地域の住民や、アニメファンに反感を持っている人から出されることもある。

西宮市でアニメの聖地になっているところの多くは、駅やその周辺、高校や住宅地、公園といった生活空間である。この生活空間がアニメに描かれ、「見るべきもの」とされたことが違和感を生んでいる原因の一つであろう。そして、もう一つの違和感は、アニメファンに対する違和感であった。アニメファンの行動は様々だが、特に目立つ行動でなくとも、地域の人々に違和感を与えるには十分だ。生活空間をわざわざ訪ねてくる様子、そして、そこにカメラを向ける様子、それらが、その場所を生活空間と認識している人間からすると奇異にうつる。

西宮北高校では、この違和感が問題にまで発展してしまうことになった。アニメファンと思

旅行者の情報発信力が高まっている現在、これまで評価されてこなかった景観や文化が、突然観光対象となることがある。旅行者の情報発信の広報効果は大きく、活用しない手はない。一方で地域住民にとっては価値が認めがたい場合もある。こうした場合、地域イメージを巡るマネジメントが必要になる。

今回は、兵庫県西宮市を事例として、地域イメージを巡る問題や取り組みについて景観論の観点から考察してみたい。

駅周辺などを観光地化

兵庫県西宮市は、アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」の舞台とされている。アニメの背景に西宮北高校をはじめ、西宮北口駅や甲陽園駅周辺などが描かれたのである。「涼宮ハルヒの憂鬱」は、谷川流氏によるライトノベル作品が原作で、京都アニメーションが制作した。2006年4月から7月にかけて第1期が放映され、その後、第2期、劇場版が

われる人が、高校の敷地内に入ってしまったのだ。一昔前であれば、学校内には地域の人が入りすることも多かっただろうが、昨今は様々な事件の影響で、学校の中に部外者が入ることは厳しく禁じられるようになっている。アニメの中では、高校の外観だけでなく、敷地内の風景も多数登場しており、ファンであれば見てみたいという気持ちもあっただろう。この行動について、学校側から敷地内に入らないようにという旨の注意が出されることになった。アニメファンの多くはマナーが良く、地域によっては、普通の観光客よりずっとマナーが良いとされることもあるが、一部のファンの行動がこうした事態を招いた。

地域住民も非日常経験

しかし、実はこうした違和感大きな可能性ももたらす。アニメに描かれたことで、それまで特に注目されなかった風景である駅や住宅街、公園が、遠くから、場合によっては海外から、目指して訪れるべき観光資源となるのだ。筆者はアニメなどのコンテンツに描かれることで価値を持つ景観を拡張現実景観と名付けている。アニメを見て観光のまなざしを作り上げた来訪者は、何の変哲もない風景にアニメの世界観を重ねて見ている。つまり、現実が拡張されている。そして、アニメファンが訪れ、様々な表現活動を行う。この表



西宮北口駅前広場



西宮市内の自転車置き場

現活動がその地域に集積していくと、そこに独特の風景が現出する。これを、オタクスケープと呼ぶ。拡張現実景観およびオタクスケープは、その価値観が理解し難い人にとっては違和感を覚えるものになるが、取り組みの仕方によっては、価値観を共有する機会となる。

にしのみやすたいる
西宮流が企画した「SOS団 in 西宮に集合よ!」では、しおり「にしのみやすたいる 西宮の回遊」が実施された。これは、「涼宮ハルヒの憂鬱」のキャラクターを、著作権者に了承を取った上で、西宮の風景に重ね、しおりを作成し、25カ所の店舗や施設で配布したのである。ファンの中には25カ所全てを回った人もおり、回遊が促進されたと言える。特筆すべきなのは、しおりに使われた風景の中には、アニメに登場しないものも含まれていたことである。つまり、このしおりは新たな拡張現実景観を創出するきっかけを作ったものと位置づけることができる。アニメファンが拡張現実景観を求めて地域を巡ることで、それを見た地域住民の中には、自地

域の何気ない景観を再認識した人もいただろう。

今後のポイント

茱ラリーは拡張現実景観を活用した興味深い取り組みである。これによって、アニメファンはアニメに登場する場所以外の西宮の魅力を感じる機会を得られている。

今後の展開としては、アニメファンの表現行為を地域住民にも理解可能な形で示し、地域住民にとっても非日常的景観となるオタクスケープを共に楽しめるイベントを実施する可能性が考えられる。例えば、埼玉県久喜市鷲宮では、「わしのみやMISSコン」が開催されている。これは、男性の女装コスプレイヤーのコンテストである。地域住民にとっては強い違和感を持つと考えられる男性の女装コスプレを、逆にコンテストとして見せている。そこでは、地域住民も自地域で開催されるイベントで非日常景観を楽しむ姿が見られるのだ。違和感はいまうまくマネジメントすると創造的な取り組みに姿を変える。

